

森のちやれんがニュース

2020 秋

Newsletter vol.21



北海道博物館でも、ソーシャルディスタンス！ 新型コロナウイルス感染対策をしながらオープンしています。

当館は新型コロナウイルスの影響で2月末より臨時休館と再開館を繰り返していましたが、5月26日からは感染対策をしながらお客様をお迎えしています。しかし、これまで通りとはいかず、ハイライトツアーなどの展示解説、一部の行事は中止となり、総合展示室の触れる展示や「はっけん広場」などは休止中です。さらに、夏に予定していた第6回特別展「恐竜展2020」も中止となってしまいました。

少しでも安心してご来館いただくために、お客様にも感染対策のご協力をお願いしております。まず入館時に、

手指の消毒と検温（37.5℃未満であれば入館可）をし、緊急連絡先をご記入または北海道コロナ通知システムにご登録いただきます。総合展示室内では、2メートル間隔の床面のマーキングを距離の目安に、ソーシャルディスタンスを保ちながら展示を楽しんでいただくようご案内しています。スタッフによる展示室内の換気や消毒も毎日欠かしません。

そのほかの感染対策については、北海道博物館のウェブサイトをご覧ください。

（学芸員 渋谷美月）

CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
再発見 昔吉さんのイナウ
- ③ 博物館事業紹介
北海道開拓の村「酒屋さん」「そば屋さん」の展示
- ④ 研究活動紹介
人と植物と自然環境 サハリン先住民の植物利用を調査する
- ⑥ はっけん広場 秋の活動報告
海外研究交流事業紹介
サハリンの湿地を巡って
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名と木田金次郎」を
木田金次郎美術館（岩内町）で開催しています
- ⑧ 活動ダイアリー
2020年6月～2020年8月の記録



収蔵資料紹介

再発見 音吉さんのイナウ

大坂 拓

研究部アイヌ文化研究グループ 研究職員

イナウはアイヌ民族の儀礼具の一つで、神々への捧げものに用いられるほか、それ自体が御神体となる場合もあります。地域・家系による違いが認められるため、集団間の系統関係を把握するのに役立つと考えられ、1930～70年代に数多くの研究者によって精力的に収集されました。当館では、今年から所蔵資料全点の確認を進めています。



作業を進める中で、「稚内アイヌ 音吉 作（関正氏 寄贈）H.KONO」と書かれた資料（写真1）が見つかりました。この記載は、稚内の音吉さんが作ったイナウを地元の関正さんが収集し、のちにアイヌ文化研究者の河野広道氏に寄贈されたことを示しています。関さんが1932（昭和7）年に聞き取った記録によれば、音吉さんは礼文島生まれで稚内市を経て豊富町兜沼に移り、当時76歳¹。狩猟の名人であり、和人入植者を支援したことでも知られています。1871（明治4）年の利尻島の名簿に「同居男ヲトキツ」

の名が見えます（写真2）。一時

期、利尻に居住したこともあったようですが、いずれにしても宗谷周辺の生まれ育ちに違いありません。

宗谷地方のイナウはこれまで、河野によるイラスト1点が広く知られてきたのみ²。その実物が職場の収蔵庫に埋もれていたのは大きな驚きでした。



宗谷地方のアイヌ文化は、海峡を挟んだサハリンアイヌと近いと推測されることもあるなか、このイナウの特徴が美幌や足寄、名寄など道東・道北地方の資料とよく類似していることは意外でした。もっとも、それが古くからのこの地域の特徴だったと即断することもできません。利尻・礼文両島のアイヌ民族は1800年頃に伝染病の流行によって激減しました。その後、宗谷からオホーツク海沿岸の場所請負人となった藤野家は、ニシンをはじめとする水産資源が豊富な宗谷地方での労働力を補うため、紋別～常呂のアイヌ民族の集落から労働人口の約半数を動員し、そこに働き口を求めて出稼ぎする人々も加わる状況が生じていました³。

道東・道北の資料との類似性の背後には、藤野家の漁場経営のもとで、サハリンとの間よりはるかに高い頻度の

人間の移動がオホーツク海沿岸のルートに生じていたことが影響しているのかもしれません。19世紀の歴史的動向の中で、18世紀以前の集団関係を上書きする形で新たな地域圏が形成されていた可能性もあるのです。



ところで、これほど重要な資料が、なぜ長いあいだ広く知られずにいたのでしょうか。実は、北海道開拓記念館時代の1981年に刊行された資料目録『民族Ⅰ』には、本資料は豊富町収集と記載とされています。当時の担当者は、資料に記された「稚内アイヌ 音吉」が豊富町兜沼で晩年を過ごしたことで著名な人物であることに気づき、目録にその結果を反映したのです。しかし、こうした経緯は歴代の職員に引き継がれず、結果として当館職員ですら、資料そのものを手に取るまでには作者に関する情報を知ることができなくなってしまいました。

資料に伴う情報を分かりやすく整理し、個人情報などに配慮しつつ整備公開していくことで、このような資料の埋没を防ぎ、アイヌ民族の歴史をより鮮やかに明らかにするための基礎を充実させていく必要があります。



写真1 音吉さんのイナウ（全長62.4cm）

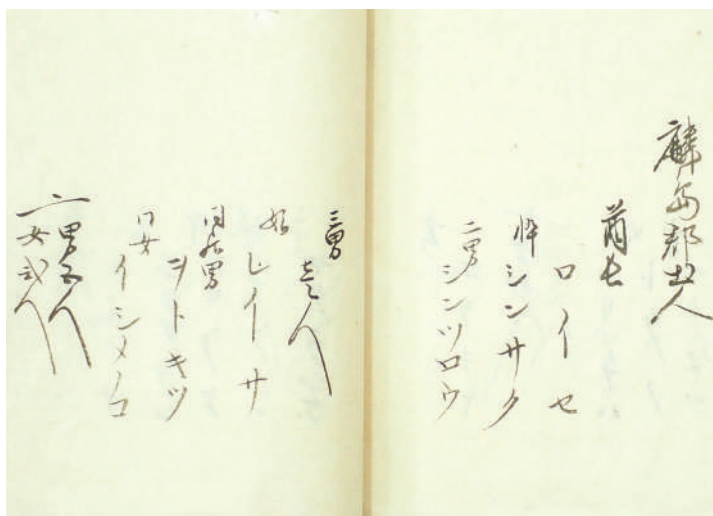


写真2 「明治四年 当藩支配所調書」（北海道立文書館所蔵）

¹ 藤沢隆史他2017「関正フィールドノート（1）」『利尻研究』36：73-82による。年齢は諸説ある。

² 青柳信克編1982『河野広道ノート 民族誌篇1』北海道出版企画センター

³ 谷本晃久2020『近世蝦夷地在地社会の研究』山川出版社

博物館事業紹介

北海道開拓の村「酒屋さん」「そば屋さん」の展示

会 田 理 人

研究部生活文化研究グループ 学芸主査

北海道開拓の村歴史的建造物の補修工事と内部展示の更新は、当館が担う大きな業務のひとつです。昨年度(2019年度)には、旧武井商店酒造部と旧三河本そば屋の内部展示を更新しました。

内部展示の更新をとまう大規模な建造物補修工事は、これまでに、2017年度に旧小川家酪農畜舎と旧菊田家農家住宅、2018年度に旧龍雲寺と旧若狭家たたみ倉で実施してきました。

今号と次号とで、昨年度の工事の概要をご紹介します。

◇

この2棟が建てられたのは、今から100年以上昔のことになります。旧武井商店酒造部は、1886(明治19)年ごろ、現在の泊村大字茅沼村に建てられました。同商店では1895(明治28)年ごろから酒造りが始められ、清酒「松の露」「玉の川」が1944(昭和19)年まで製造されました。

旧三河本そば屋は、1909(明治42)年ごろ、現在の小樽市住吉町に建てられました。同そば屋があった地区は、小樽市街の中でも古くから栄えたところで、食事や宴会の場として利用されてきました。

◇

さて、補修工事が始まる前の大きな作業として、まず、展示資料の現況調



旧武井商店酒造部



旧三河本そば屋

査を実施します。ともに、北海道開拓の村に移築・復元されてから30年以上が経っています。資料の中には破損してしまったものもあります。

100年前の「酒屋さん」、「そば屋さん」の商売の様子や暮らしぶりを現在に、後世に伝えていくためにも、展示の現状を記録に残しておくことに、大切な意味があります。

建物の大規模補修工事を実施するためには、建造物内部で展示をしている資料、展示ケース・什器類などを、すべて建造物の外へ「引越し」させなくてはなりません。実は、この2棟で展示している資料の数は、開拓の村でもトップクラス。限られた時間の中での引越し作業となりました。

◇

補修工事が完了したあと、ようやく、展示作業の再開です。年が明けて、開拓の村もすっかり冬景色になっていました。再び展示資料などを建造物の内

部に搬入し、再配置作業に取りかかりました。

建造物の補修工事を進めている間に、破損した資料の修復を行い、新たな解説パネルを作成するなどして、展示更新作業の準備を進めてきました。2月の末から、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、開拓の村も休村となったため、実際の展示作業は、来村者がまったくいない、静かな村のなかでの実施となりました。

◇

補修工事と展示の更新が終わり、2棟とも、この春から公開をしています。

建造物が持つ歴史的意義や機能、建造物で使用されていた当時の暮らしぶりや暮らしの技術などを後世に伝えていくために、今後も、移築・復元した当時の展示方針を踏襲しながら、内部展示の更新を進めていきたいと考えています。



展示更新後の旧武井商店酒造部（酒造りの道具）



展示更新後の旧三河本そば屋（調理場）

研究活動紹介

人と植物と自然環境
サハリン先住民の植物利用を調査する

1968年大阪生まれ。→静岡→神奈川→北海道と次第に東／北に移り、次はサハリン、と冗談を言っていたら本当に通うことになるとは。写真は、村の対岸の湿原でのベリー摘み兼聞き取り調査からモーターボートで戻るところ。

きっかけ

人の暮らすところ、どこにでも植物は生えています。ところが、北東アジアの先住民について書かれた本を開くと、主な生業は「漁労」「狩猟」「トナカイ飼育」などと書かれています。

……え、それだけ？

という疑問が私の研究の出発点でした。世界中どんな地域でも、暮らしに不可欠な「資源」として、そこにある植物を利用しているはずです。

私は大学院で植物生態学を学びましたが、動植物と人との関係にも関心がありました。当館の前身である開拓記念館の学芸員となって間もない1996年、幸運にも調査出張でロシアのハバロフスク地方に行けることになりました。そこで、冒頭の疑問に答える内容を調査テーマに選びます。すなわち、主に狩猟が主な生業とされているエヴェンキ、ネギダールなど先住民の呼びを訪ねて、どんな植物をどのように

使ってきたのかについて聞き取り調査しようと考えたのです。結果、やはり多くの植物の利用が確認できました。それまでどんな文献にも書いていなかったことも見聞しました。

昔の民族学者にとっては、「どうやってクマを解体するか」とか、「凍った川の中に魚を獲る網をどうやって仕掛けるか」が主な関心事であり、植物の採集・加工法などについては、あえて調査したり、記録したりしようと考えなかっただけなのです。

それと、どうやら、調査者がもっぱら男性だったことも動物重視の傾向に関係しているようです。聞き取りの相手も男性に偏りがちで、植物に関わる仕事の主な担い手であった女性からの情報が少なかったのでしょう。

サハリンへ

さて、「北東アジア先住民の植物利用」という研究テーマを得た私は、2002年からは、北海道の北隣の島・サハリンを主なフィールドにしています。

ここでサハリンの自然環境を少しだけ紹介しましょう。北海道が77,982km²でサハリンは76,400km²と、面積はほぼ同じ。ところが植物（高等植物）の種類は、北海道が約2,000種とされるのに対しサハリンは約1,200種と、グッと少なくなります。南北に細長く、南部は広葉樹やトドマツやエゾマツの林

水島 未記

研究部自然研究グループ 学芸主幹

があって北海道と似ています。

ところが北に行くとならと景色が変わり、グイマツという落葉針葉樹（カラマツの仲間）の林が大部分を占めます。湿原や砂州、砂丘が多いのも特徴です（図1）。北海道では高い山の上にあるハイマツやコケモノなどのいわゆる高山植物が、サハリン北部では海岸の砂丘に生えているのが、慣れないうちは不思議に感じました（図2）。



図2 砂丘に多いハイマツ

聞き取り調査

サハリンの北部で最も多い先住民族はニヴフです。私はニヴフの住む村を訪ね、おばあちゃんたちに植物の利用についてのお話を聞いてきました。

過去の民族学の文献には、植物利用に関する情報が少ないだけでなく、あっても種類の特異（同定）が曖昧だったり、不正確だったりする場合も多々ありました。魚や獣などに比べれば植物は圧倒的に種数が多く（例えばサハリンで哺乳類は小形種を除くと13種だけ）、かつ似た種が多いので、正しく識別するだけでも難しいためです。

私の調査では、一緒に植物採集に連れて行ってもらうなどして、聞き取りはできるだけ野外で植物の実物を前に行っています。加えて周辺の植生・植物相などの調査や証拠標本の採集も行うことで、極力正確に同定できるようにしています。民族学・文化人類学等の研究者だけによる調査では限界があり、私のような植物研究者が関わる意義のひとつがここにあります。



図1 サハリン北部の湿原



図3 一緒にコケモモ摘みに

豊かな植物利用文化

10回を超えるフィールドワークを通じて、約40科100種以上にのぼる植物の利用を確認できました。過去の調査では利用が知られていなかった種や同定されていなかった種も多くあります。用途も食用・薬用・儀礼用・道具用など多様で、生活の隅々まで使われていることがわかりました。分布種数に比べて利用されてきた種類は少なく、生業としての重要性は漁労や海獣猟に決して劣らないことを明らかにすることができたのです。

いくつかの村を訪ね、多くの話者から話を聴くことで、個人レベルの嗜好にとどまらないサハリン・ニヴフの植物資源利用文化全体に共通する特徴も見えてきました。例えば、湿原植物を多用すること、コケモモなどのベリー類（水分が多く軟らかい果実）が非常に重要視されること（図3・4）などです。

植物認識と民俗分類

調査を進める中で、利用植物の正し

い同定のためには、植物分類学の体系に当てはめるだけでなく、その民族が植物をどう捉え、現地の植物相という母集合の中でどう位置づけているか、いわゆる民俗分類が重要であることに気づき、その植物の分類についてのその人（話者）自身の認識や、話者が用いる植物名称などの情報もメタデータとして集めるようになりました。そのため、民族文化にも詳しい言語学研究者と協働して調査しています。じっさい、話者の認識している植物の「種類」と植物学上の種がイコールではない場合もいくつか発見しました。

背景にあるもの

近年は、植物利用文化がサハリン北部の自然環境とどう関わっているかに着目しています。植物は種類が多く、さらに地域によって見られる植物種の組み合わせも変わります。だから、利用する種類の選び方、利用目的、具体的な加工方法など、植物利用に関わる文化は、動物のそれと比べて、より強く周囲の環境の影響を受けていることが予想できます。植物利用を調べることで、自然と人との関わり、中でも自然環境が人の文化に及ぼす影響について、より深く理解できるはずです。

例えば、サハリンの北部にはアムール川が運んできた膨大な量の砂が厚く積もっていますが、ニヴフの植物利用文化は、この砂の層の存在に強く影響されていることが明らかになりました



図4 クロマメノキ（ブルーベリーの一様）の実を使ったニヴフの伝統料理

（図5）。

新しいテーマ

一方でニヴフは、サハリンから間宮海峡を挟んだ大陸側のアムール川河口地域にも昔から住んでいます。この大陸側のニヴフを訪ねて調査したところ、植物利用の嗜好性に若干の違いがあるように感じられました。同時に、大陸側では居住地周辺に湿原が多くはないなど、サハリンとは自然環境に違いがあることがわかりました。それぞれの差異を詳しく分析することで、自然資源の利用に関わる文化が自然環境からどのような影響を受けて成立しているのかをさらに詳細に知ることができると考え、次はそこに焦点を当てた調査計画を立てました。

…と、新しい研究を進めている中で勃発したコロナ禍。今シーズンは予定していた調査に行けず、ロシアの間ではひきつづき行き来が制限されている状況です。サハリン在住の知人によれば、感染確認数は北海道を超える2千人以上とのこと。現地でお世話になっている人たちの健康状態も心配です。

それでも、衛星画像を活用したりリモートセンシングによる植生の把握や、GIS（地理情報システム）を活用した解析など、北海道にいてもできる研究を進めていく予定です。

とはいえ、おばあちゃんたちからの聞き取り調査は、「リモートで」とはいきません。以前のように自由に訪問できる日が早く来るよう願っています。

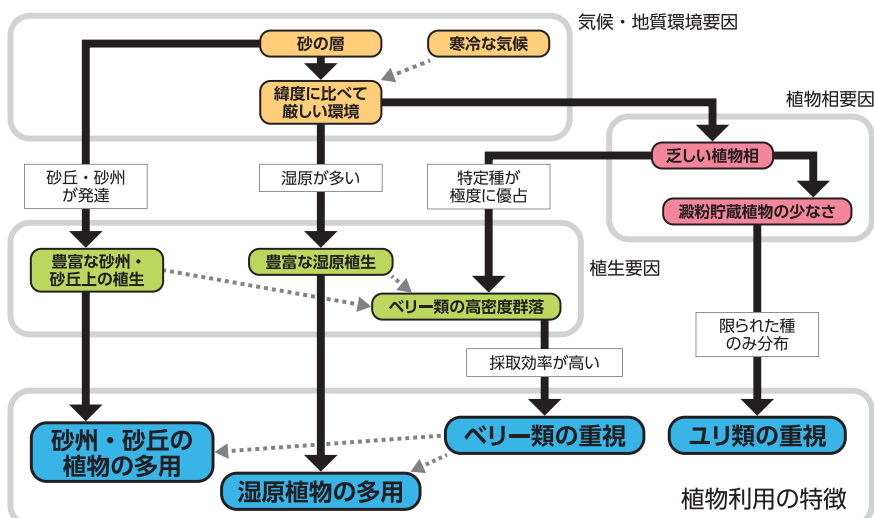


図5 サハリン北部の自然環境とニヴフの植物利用文化の関係

はっけん広場 秋の活動報告

はっけん広場での活動記

こんにちは、皆様。当館では展示を見るだけではなく、はっけん広場において体験できる「はっけんキット」をお楽しみいただけます。アイヌ文化に関するものや生活文化に関するもの、伝統遊具なども体感できます。ただ、新型コロナウイルス感染拡大防止に向け、はっけん広場の活動を休止しているため、お客様の姿もなく静まっています。



はっけん広場での簡易マスク作り

この間、はっけん広場では、マスクを持っていない方用に簡易マスクを作ったり、既存のキットを補修したりと、再びご利用いただける日を心待ちにしながら作業をしているところです。

また、解説員や学芸員が話し合っ、当館周辺の落ち葉を使った図鑑を新たに完成することができました。落ち葉は、7、8年前に押し葉にしたものです

が、時間をかけて作ったので、整理する際に一枚一枚が愛おしく感じられました。この落ち葉を通して葉っぱの形を目で観察して、木々によって違う特徴を持っていることを知っていただく機会になれば嬉しいです。

落ち葉から木の種類がわかったなら、いつもの秋とは違った楽しみ方ができるかもしれませんね。



新たなはっけんキット（北海道博物館周辺の落ち葉を使った図鑑）

海外研究交流事業紹介

サハリンの湿地を巡って

北海道とロシア・サハリン州は1998年から姉妹提携を結んでおり、その一環として北海道博物館とサハリン州郷土博物館の間で毎年、研究交流を行っています。私は動物担当の学芸員として、2017年と2019年にサハリン各地を案内していただきました。

サハリンは南北約948kmの細長い島で、これは本州の南北の長さとはほぼ同じです。この島には無数の湿地が点在

しており、ハクチョウやカモ類、オオワシなど、シベリア方面で子育てをした鳥たちが日本列島に渡ってくるための重要な中継地となっています。北海道で見られる冬鳥の多くが、実はこのルートを通っているのです。近年はサハリンでも油田などの開発が進んできましたが、それでも豊かな自然環境が残されています。特に北部には手つかずの湿原が信じられない規模で広がっ

ていました。日本では絶滅してしまったカワウソもまだたくさんいるらしく、川や海岸のあちこちで痕跡を発見することができました。

今回の調査の成果は、来年度以降に開催を計画している、湿原に関する展示会などで紹介していきます。また、本年度はコロナ禍などの心配もありますが、サハリン州郷土博物館とは今後とも交流を継続し、協定を締結して新しい研究をスタートさせる予定です。



サハリン北部・ノグリキ近郊の湿地（2019年10月、風を用いて撮影）



サハリン北部・オハ近郊の油田施設とハクチョウ（2019年10月撮影）

表 溪 太

研究部自然研究グループ 学芸員

アイヌ民族文化研究センターだより

アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名と木田金次郎」を 木田金次郎美術館（岩内町）で開催しています

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。

今年度は、7月3日（金）から11月3日（火・祝）までの日程で、岩内郡岩内町の木田金次郎美術館の2020特別展示「アイヌ語地名と木田金次郎」を、当館との共催で北海道博物館の第9回アイヌ文化巡回展としても開催させていただきます。

* * * * *

木田金次郎氏（1893～1962）は、故郷である岩内を中心に、「その地の自然」をじっくりと眺めて描いた画家です。そのフィールドは北海道全体に及び、道内各地の風景も描いています。

今回の展示会では、木田金次郎美術館等が所蔵する、木田金次郎氏が描いた絵を展示するとともに、当館が所蔵するアイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏（1899～1992）の地名調査資料のパネルを展示し、それぞれの絵に関わる地名を紹介しています。

* * * * *

山田秀三氏の地名調査資料としては、1968（昭和43）年に寿都から岩内を経由して積丹半島までを調査したときの記録と、1982（昭和57）年に神恵内村や泊村などの地名を調査したときの記

録を中心に、岩内町周辺の地域に関する資料を展示しています。その他、道内各地の風景を描いた木田金次郎氏の絵にあわせて、札幌周辺、根室の納沙布など、道内各地の地名調査資料も紹介しています。

* * * * *

今回の展示会は、木田金次郎美術館からの提案によるもので、展示会の基本的な内容も美術館からのご提案がもたれています。それに当館も共催として積極的に関わり、展示制作に協力させていただきました。美術館を会場にアイヌ文化巡回展を開催するのは初めてのことで、展示会をご覧いただいた皆様の感想や反応を、どきどきしながら待っているところです。

* * * * *

展示会の様子は、美術館のミュージアムショップ等で購入できる図録（700円（税込））で通覧いただけるほか、Googleマップのストリートビューでも展示会の会場をすべて見られるようにしています。このストリートビューは、木田金次郎美術館のフェイスブックなどからもご覧になりますので、遠隔地の方々など皆様にご覧いただければ幸いです。



写真① 展示会の様子

■木田金次郎美術館2020特別展示 （第9回アイヌ文化巡回展）

「アイヌ語地名と木田金次郎」

会期：11月3日（火・祝）まで

会場：木田金次郎美術館

（岩内郡岩内町万代51-3）

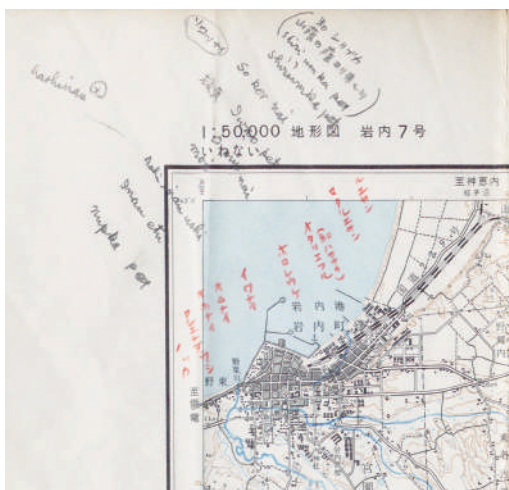
開館時間：10:00～18:00

（入館は17:30まで）

休館日：月曜日（ただし祝日にあたる

場合はその翌日）

（アイヌ民族文化研究センター
研究職員 遠藤志保）



写真② 山田秀三の地名調査資料（部分）
（5万分の1地形図「岩内」）



写真③ 展示会ポスター

活動ダイアリー

2020年6月～2020年8月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

5月31日(日)

■はっけんイベント「おうちであそぼう「恐竜紙ずもう」」を配布。7月31日(金)まで。配布数694セット。



6月11日(木)

■開催中止となった第17回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える」を北海道博物館HPにてオンライン公開。

6月13日(土)

■ちゃれんが古文書クラブ①を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

6月19日(金)

■ARスタンプラリー3（ゴールデンカムイ、チェックインスポット⑥）設置。2021年3月31日(水)まで。

6月20日(土)

■百年記念塔視察。報道機関。

6月21日(日)

■百年記念塔視察。守る会・未来を考える会。

6月24日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：添田雄二。

7月3日(金)

■2020特別展示「アイヌ語地名と木田金次郎」展共催、第9回アイヌ文化巡回展を開催 於：木田金次郎美術館。11月3日(火・祝)まで。

7月17日(金)

■北海道みんなの日（無料開放）。

■カルチャーナイト2020オンライン開催。当館は動画「家族みんなでおうちミュージアム ぐるぐるまきのアンモナイト折り紙を折ろう！」で参加。7月19日(日)まで。

7月19日(日)

■ちゃれんが古文書クラブ②を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。



7月29日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：杉山智昭。

8月1日(土)

■はっけんイベント「きょうりゅう FAN FUN FAN」（恐竜好きの楽しい扇子）を配布。9月30日(水)まで。



■「わたしたちが考える北方領土問題コーナー」を設置。8月30日(日)まで。



8月14日(金)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入れ替え。

①近世文書を読む③工藤家文書



②船絵馬



③折りの造形－キツネ神の舟－



④新しく仲間入りしたアイヌ民族に関する資料たち



⑤馬追いの道具



⑥北海道とオリンピック



⑦恐竜と鳥をつなぐ骨



8月15日(土)

■「草原の主・トノサマバッタをさがそう」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表深太・鈴木あすみ・自然ふれあい交流館スタッフ。



■ちゃれんが古文書クラブ③を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

8月18日(火)

■令和2年度博物館実習（14名）。8月28日(金)まで。

来館者数

○2020年6月～2020年8月

総合展示室 11,099人 特別展示室 0人 はっけん広場 0人

○累計(2015年4月～2020年8月)

総合展示室 528,387人 特別展示室 388,040人 はっけん広場 120,784人

森のちゃれんがニュース 第21号

発行日：2020年9月29日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2020